

2022年6月19日高知教会礼拝説教

松浦伝道師

説教:「神の右に座る方」

聖書:ルカによる福音書 22章 63～71節 (新約聖書 156頁)

○はじめに

わたしが説教を担当しているときは、ルカによる福音書を読み進めています。長かった22章も62節まで来ました。イエス様が逮捕され、大祭司の家へと連行されたこと、その後をそとついで行って大祭司の家の中庭に入り込んだ弟子のペトロが、周囲の人々から「あなたもあのイエスの仲間だろう」と言われて、三度、イエス様を「知らない」と言ってしまったことまでを読んできたのです。本日の箇所、22章の終りの63節以下には、捕えられたイエス様が見張りをしている者たちによって侮辱を受けたこと、そして夜が明けて、ユダヤ人の最高法院に引き出されて裁判を受けたことが語られています。その裁判によってイエス様は、神を冒瀆する者、つまりユダヤ教における異端者だと判断されたのです。現在聖書を開いている私たちは、そういう大変重苦しい、心が暗くなってしまう聖書箇所を読んでいます。この後の23章はいよいよイエス様が十字架に張り付けられる場面となります。

どうして私たちはこの礼拝でこんなに暗い箇所を読まなければならないのでしょうか、もう少し明るい、希望の持てる聖書の箇所を選んで読んだ方がいいのではないかと、そのように思われる方もいらっしゃるかもしれません。礼拝ごとに私たちは、少しずつルカによる福音書を読み進め来たところと最初に言いましたが、思い返してみますと、私が赴任してから二年が経ちました。新型コロナウイルスと向き合う中で、まさに、私たちが困難な状況に置かれている中でも、節を追って聖書の御言葉に聞いてきたのです。そして、今私たちは、ルカによる福音書にしるされている、イエス様の受難の物語。つまり福音書の中心的な部分に差し掛かろうとしています。先の見えない新型コロナウイルスにおいても、ロシアのウクライナ侵攻によって長期化している戦争の中において、私たちの心に不安を抱えている、その状況の中で、私たち一人一人に語られている主のみ言葉に耳を傾けていきたいと思えます。

○イエス様への侮辱とペトロの否認

さて、ゲッセマネで逮捕されたイエス様は大祭司の家へと連れて行かれました。時はもう夜更けです。夜が明けてから、ユダヤ人の最高法院が招集されてイエス様の裁きが行われようとしています。イエス様はその間、大祭司の家で監視の下に置かれていました。本日の63～65節に語られているように、見張りをしていた者たちから侮辱、暴行を受けたのです。54節以下の、ペトロが三度イエスを知らないと言ったという話も、それと同時並行的に起っています。監視されているイエス様が暴行を受けている、中庭にいる人々は火に当たりながらそれを見物していたのです。前回の61節に、ペトロが三度目にイエスを知らないと言ったとたんに鶏が鳴くと、主は振り向いてペトロを見つめられた、とありましたが、それ

は様々な侮辱、暴行を受けているイエス様が、その中で一瞬振り返り、ペトロとイエス様の目が合った、ということでしょう。ですから63～65節はあのペトロの話と結びつけて読むことができます。そうすることによって、ペトロを見つめたイエス様のあのまなざしの意味がよりはっきりとしてきます。

ご自分のことを三度、ということは徹底的に、「知らない」と言い、関係を否定してしまったペトロを、イエス様は、侮辱、暴行を受ける苦しみの中から見つめられたのです。それは、ペトロの、そしてペトロに代表される私たちの、罪を全て背負って、その罪が赦され、救いが与えられ、信仰をもって再び歩み出すことができるために苦しみを受けて下さっている方のまなざしです。私たちのために侮辱や暴行の苦しみを受けて下さった、そのイエス様のまなざしの中にペトロは、そして私たちも置かれているのです。このまなざしと出会った時、ペトロは外に出て激しく泣きました。彼は自分の弱さ、罪深さをこの時初めて本当に知り、心から悔いたのです。そのペトロに復活されたイエス様が再び出会い、語りかけて下さったことによって、彼は使徒として立ち上がることができたのです。

○イエス様と神様との関係を問う

さて、夜が明けて、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まって来て、最高法院が開かれました。「サンヘドリン」と呼ばれるこの最高法院は、ユダヤ人たちの最も権威ある決定機関ですが、集まっているメンバーから分かるように、政治的な決定だけではなく、この裁判において、むしろ宗教的な決定を下そうとしていました。当時のユダヤにおいては政治と宗教は切り離すことはできませんでした。しかしユダヤの国は政治的な部分においてはローマ帝国に支配されていましたから、最高法院はもっぱら宗教的な面での権威しか発揮できなかった事情があったのです。そこにおいて行われたイエス様の裁判で問われたのはまさに信仰的な事柄でした。つまり、イエス様は神様とどのような関係にあるのかという事が問題とされたのです。

先ず問われたことは、「お前がメシアなら、そうだとするがよい」ということでした。メシアという言葉はヘブライ語で「油注がれた者」という意味があります。つまり、神様から特別な務めに任命された者として「救い主」を意味しています。祭司長たちのこの問いは、「お前は自分を神から遣わされた救い主だと言うのか、そうであるなら、いまはっきり言え」ということです。それはまさにイエス様がご自分と神様との関係をどうとらえているのか、という問いであるわけです。

○真剣でない問いかけ

この問いに対してイエス様は、「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう。わたしが尋ねても、決して答えないだろう」とおっしゃいました。このみ言葉は大切なことを示し教えています。ユダヤ人の宗教的指導者たちは、イエスと神との関係を問うています。しかしイエス様は彼らの問いには答えようとなさらないのです。なぜなら、彼らの問いは本当の意味での問いになっていないからです。「わたしが言っても、あなたたちは決して信じ

ないだろう」という言葉がそれを示しています。つまり彼らはイエス様に問うているけれども、そもそも、イエス様の答えを聞いて信じようとは全くしていないからです。彼らが考えているのは、ただイエス様を有罪にするための材料を、得ようということだけです。この方が救い主なら、従って救いを得ようなどとはこれっぽっちも思っていない、批判材料を得るためだけに問うているのです。しかし本来、イエスが救い主キリストであるかどうかを問うというのは、もっと真剣な、自分の生き方、人生の全てがそこにかかっているような問いであるはずで、その問いへの答え次第で、自分の生き方が変わり、新しい人生が始まるような問いであるはずで、そういう人生をかけた真剣さがこの問いには全くありません。ここはある意味では大変深刻な場面ですが、語られている言葉は全く真剣でない、まことに軽い問いでしかないのです。そういう問いにはイエス様はお答えにならないのです。

○逆にイエス様から問われているということ

彼らは、イエス様を尋問し、問うていますが、イエス様に問うことは自分自身がイエス様から問われることだということに全く気づいていないのです。そのことを語っているのが、「わたしが尋ねても、決して答えないだろう」というお言葉です。イエス様に「あなたは救い主なのか」と問うことは、逆にイエス様から、「あなたは私を救い主と信じるのか」と問われることなのです。しかし彼らは、イエス様からの問いに答える気は全くありません。そもそも自分が問われていることに全く気づいていません。一方的に自分たちがイエス様を尋問していると思っていたからです。先ほど申しました、イエス様への問いは自分の生き方、人生の全てがかかっているような問いだというのは、言い換えれば、イエス様に問うことによって逆にイエス様から問われ、答えを求められる、そういう問いだということです。自分の人生をかけてイエス様からの問いかけに答えようという思いなしに何を問うても、イエス様からまともな答えは帰って来ない、そういう大切なことをこのみ言葉は私たちに教えているのです。

○全能の神の右に座している方

しかしイエス様は、彼らの問いにはまともに答えないながらも、ここで決定的なことをお語りになりました。それが69節の「しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る」というみ言葉です。「人の子」というのはイエス様ご自分のことをおっしゃる時にお使いになった言い方です。つまり今から後、私は全能の神の右に座るのだとおっしゃったのです。「今」というのは、このように捕えられ、裁かれ、その日の内に十字架につけられて殺される、そして三日目に復活してその後天に昇られる、それら全てを含めた「今」ということです。イエス様ご自分が十字架の死と復活と昇天とを経て全能の父なる神様の右に座ることになるとはっきりとこの裁判の席で言われたのです。これは彼らの問いに対する答えではなくて、むしろイエス様ご自身の宣言なのです。イエス様ご自分が神の右に座す救い主であられることを、問いに対する答えとしてではなくて、ご自分から宣言なさったのです。そしてその宣言はやはりそれを聞く者たちへの、つまり私たちへの、問いかけです。わたしが今や

全能の神の右に座している救い主であることをあなたは信じるか、とイエス様は私たちにこの御言葉を通して、いま、問いかけておられるのです。

しかしこれが自分に向けられている問いだと感じない者たち、一方的にイエス様を裁き、尋問していると思っていない者たちは、この言葉に「してやったり」とほくそ笑むのです。そして「では、お前は神の子か」と問うのです。全能の神の右に座するということは、自分を神と同等の者としていることです。ということは、「人の子」と言っているけれども、やはり自分を「神の子」としていることではないか、ということです。イエス様がそれを認めれば、もうこの裁判は終了です。自分を神と等しい者とするなどということは彼らにとってはとんでもない冒瀆であり、有罪を確定できるのです。

○あなたたちが言っているとは？

彼らのこの問いに対してイエス様は、「わたしがそうだとはい、あなたたちが言っている」とおっしゃいました。この箇所は新共同訳聖書以前の口語訳聖書では「あなたがたの言うとおりでである」となっていました。しかし聖書が書かれた元の字を直訳するとこの新共同訳の「わたしがそうだとはい、あなたたちが言っている」となります。なんだか回りくどい、イエス様の言い回しに、私たちはこのお言葉をどう理解したらよいか、なかなか難しいところですが、先ほども見てきましたように、イエス様に問うことはイエス様から問われることだ、ということ的前提にして理解してみたいと思います。つまり、私が神の子であるということをおあなたがたはどう考えるのか、結局、私を神の子と信じ、従うのか、それとも私を否定して抹殺しようとするのか、あなたがたはどちらの道を選ぶのか、と問いかけておられるという事です。

さらに、イエス様のこの言葉に込められた思いというのは、「私はこれまで自分のことを『人の子』と呼んできた。一度も、『自分は神の子だ』などと言ったことはない。ところが、私が神の子かということをおあなたがたが言ってくれるとはどうしたことか。いかにも私は、あなたがたが口にした通り、神の子であり、人の子としてこの世に来た者だ」ということでしょう。そういう意味では、「あなたがたの言うとおりでである」という口語訳は内容的には正しいのです。イエス様はここで、ご自分が神の子であり、救い主キリストであることをはっきりと宣言なさり、あなたはそのことを信じるかと問いかけられたのです。しかし最高法院の人々は勿論、これをそのような問いかけとしては聞かずに、71節にあるように、これでイエスの有罪を決定づける証拠が聞けた、これ以上証言が必要だろうかと思っただけだったのです。

○質問の逆転

このように、このイエス様の裁判の場面で問われているのは、イエス様が救い主キリストであるかどうか、また神の子であるかどうか、ということです。人々はそのことをイエス様に問い、イエス様がそれにどう答えるかによって、有罪か無罪を決めようとしたのです。しかしこの裁判で起ったことは、逆に彼らがイエス様によって問われたということでした。私が救い主キリストだと答えたらあなたがたはそれを信じるのか、私の与える救いにあずかろうとするのか、そういう思いなしに「救い主か」と問うことは無意味ではないか、またあなたがた

は私が神の子かと問うが、あなたがた自身はどう思っているのか、私を神の子と信じるのか、それとも拒むのか、そのようにイエス様の方が彼らに問うておられるのです。イエス様を裁いているはずの人々が、逆にイエス様によって裁かれていると言ってもよいでしょう。ユダヤ人の最高法院における、イエス様と神様との関係を問題とする、つまり信仰の問題における裁判においてこういうことが起ったことをルカは描いているのです。

この裁判において起ったことを、私たちは自分が主イエスを信じる信仰を与えられていくことの中で体験するのではないのでしょうか。つまり私たちも、最初は、あたかも主イエスを尋問するような思いでいるのです。「あなたは本当に私たちの救い主なのですか？ 私たちにわかるようにはっきり教えてください」、「あなたが神の子だというなら、その証拠を見せてください」、聖書と教会に出会い、信仰について考え始めた頃、私たちはそのような問いをイエス様に投げかけているのではないのでしょうか。そしてそういう挑戦的な問いに対しては、イエス様ご自身も答えてはくれないのです。それは問いそのものが適切ではないからです。イエス様を裁いている最高法院の人々が信仰を得ることができないように、そのような問いからはけっして信仰は生まれません。私たちに信仰が与えられるためには、その考え方に逆転が起らなければなりません。イエス様に問いかけている自分が、実はイエス様から問われている。そのことに気付かなければならないのです。イエス様は私たちに、「あなたは私が救い主か、神の子かと問っているが、もし私が救い主ならその救いを得たいと本当に願っているのか、私を神の子と信じて、礼拝し、従う者となろうとしているのか、自分の人生をかけてその問いを私に投げかけているのか？ むしろ私を救い主として受け入れる覚悟はあるのか、そういうイエス様からの問いかけの前に自分が立たされていることを覚え、その問いと真剣に向き合い、それに答えていくことによってこそ、イエス様は本当に救い主なのか、という問いへの答えが与えられるのです。そして私たちは、神様の招かれ導かれて、信仰が与えられるのです。つまり、新しく生き始めることができるのです。

○イエス様を尋問し、侮辱する私たち

本日、この礼拝において、神様がこの聖書箇所を通して私たちに語りかけておられるのは、まさにこの問いかけなのではないのでしょうか。私たちはともすれば、イエス様に対して、また神様に対して、上の立場に立って、一方的に尋問をしてしまうのです。これはどうなのか、あれはどうなのか、あなたは何をしているのか、と問い、その答えによって自分が神様を裁き、有罪か無罪かを決めるような思いに陥っているのです。そのような私たちの姿が、本日の箇所前半、63～65節の、イエス様を侮辱した見張りの者たちにおいて描かれていると言えるでしょう。

彼らはイエス様に目隠しをして殴り、「お前を殴ったのはだれか。言い当ててみろ」と言いました。普通の囚人にこんなことはしません。これは、イエス様が、神様のみ言葉を告げる預言者として活動しておられたことを受けてのことです。つまり「お前が神から遣わされた預言者で、神の言葉を語るができるなら、誰が殴ったかも分かるだろう、言い当ててみろ。そうすれば、お前が預言者だと認めてやる」ということです。だからといって彼らはイエ

ス様を預言者として敬おうとは全く思っておりません。イエス様を侮辱し、暴行を加えている者たちと、イエス様を裁いている最高法院の人々とは、全く同じ思いでいるのです。そして私たちも、それと同じ思いでイエス様を見つめ、イエス様に問うていることがあるのではないのでしょうか。そのような私たちの問い、尋問、裁きの下で、イエス様は侮辱を受け、暴行され、そして十字架につけられて殺されていったのです。しかしそのイエス様の苦しみと死によって、父なる神様は私たちに救いを、罪の赦しを与えて下さったのです。

○神様からの問いに向き合いつつ誠実に歩む

私たちは今、この神様によって問われています。あなたは神の子であるイエス・キリストがあなたの罪を全て背負って十字架にかかって死んだことを信じるか、そしてその主イエスが復活して永遠の命の先駆けとなり、今や父なる神の右に座してあなたを、またこの世界を導いておられることを信じるか、と問われているのです。この問いと真剣に向き合い、それに答えつつこの困難な時代を歩んでいるのだと思います。この問いと真剣に向き合っていく中で、今私たちに神様が求めておられることが何であるのかも示されていくでしょう。新型コロナウイルスという深刻な影響の下に今私たちのこの社会はあります。悲しみや絶望を抱えている人がいます。厳しい経済状況の中で、格差が広がり、そのことでも不安、恐れが私たちの心を閉ざし、人を愛し、よい交わりを築くことがますます難しい時代かもしれません。先の見えない、希望の見いだせない思いが、若い人々にはあるかもしれません。それらの問題を抱えている中で、私たちはどうしたらよいか分からなくなってしまうのです。ですが、一つ一つのその出来事を、神様から与えられている問いとして受け止め、私たちの罪を背負って苦しみを受け、死んで下さったイエス様のまなざしの中でその問いに真剣に向き合っていきたいと思います。いつも共にいてくださる神様に励まされながら、今週もそれぞれの場所へと遣わされていきたいとねがいます。